

2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

近藤玲子 「フリースクール・オープン教育から学ぶ だれもが通える学校とは」

学校教育にはいじめや不登校、学級崩壊など、深刻な問題がいくつも横たわっています。不登校の子どもの数も年々増え続け、統計上は1学級に少なくとも1人は不登校の子どもがいるといえます。これでは、学校に明るい展望を見出すことは困難です。

フリースクールは、従来の学校教育に対する一種のアンチテーゼとして、学習指導要領や検定教科書などに必ずしも縛られない自由な教育を目指して、相次いで設立されるようになりました。フリースクールは不登校児のための学校だ、というイメージもありますが、単なる不登校児の受け皿とみなすことは、適切ではないと思います。

既存の学校に適應できない不登校児がフリースクールに通う場合、適應できない子どもの側に問題があると考えなのか、それとも不適應者をどんどんスパインアウトしまう学校のシステムに問題があると考えなのかによって、対策は全く異なったものとなるでしょう。

かねてより学校教育に関心の高かった近藤さんは、まずフリースクールに着目しました。東京にあるフリースクール「東京シュール」を事例としてフリースクールの現状を調べています。

近藤さんの着眼のユニークなところは、フリースクールを研究してはい終わり、にならないところです。近藤さんの関心の焦点は公立学校の改革であり、公立学校をどう変えていくべきかを考える上で、フリースクールから良いところを学びとろうというのが、この論文の趣旨です。子どもを主体に据えること、おしつけや強制をしないこと、教科の学習以外に好奇心をかきたてる魅力的なプログラムを用意することなど、フリースクールから学びとれる要素はたくさんあるようです。

さらに、近藤さんはオープン教育という人間性重視の教育方法にも注目しました。これは既に一部の公立学校で実践されているもので、フリースクールとも理念的に共通するものがあります。

フリースクールとオープン教育の事例から、「誰もが通える学校のかたち」として「個を育てる教育プログラム」などの提案をまとめていますが、いずれも現実の事例に則して述べられているので、実現可能性の高い内容となっています。

不登校児の受け皿があればよい、というのではなく、公立学校の不登校児をなくすよう学校教育のプログラムを見直すべきだ、という本論文の主張は、とても説得的だと感じました。